



町民文芸

只見短歌会 令和三年八月詠草

北国の夏は短し秋あかねか早も飛びかひ我が目うたがふ
馬場 八智

ボーナスが出たよばあさんおみやげは食物駄目よ制限ありて
渡部ゆき子

報道に豪雨災害痛ましきコロナ猛暑やオリンピックと
関谷登美子

花々の咲き移ろうを見回りにて時には日除けの傘を差しやる
目黒 富子

白藤の下に植ゑ替へする我に通る人ごと声かけくるる
新国由紀子

今年こそと帰省楽しむ娘らに我慢してねと伝ふ切なき
渡部ヨリ子

なが病みて逝きたる従姉に哀しみの静まらずして弔辞書きつぐ
新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会 八月定例会

老鶯や山気のせまる県境
雑木林の隙間つくつく法師かな
礼

枝豆の太る夕べや匂い立つ
曾孫五人我八十や盆用意
一穂

水飲むや支柱の先の赤とんぼ
妻帰宅西瓜の出来を尋ねおり
修一

鳳仙花弾け尽くして終戦日
戦争の果てなき星を大銀河
幸生

遠き日の祖母の涙や終戦忌
夏草や刈れども刈れども玉の汗
信

宇多喜代子 指導

半夏雨草刈り機鳴る村普請
つく息を少しとどめや滴りて
都

新松子故人と対す写経かな
空蟬を袋いっぱい拾う子よ
一恵

帰省の子岩魚を五匹釣りにけり
停年後の夢叶いて夏野菜
真理子

早朝に野菜を採りて友尋ね
梅雨の朝草刈る姿に「ありがとう」
睦子

